

ていないと推測できる。たしかに、受験教育からの脱却をめざした教育改革のもと、子どもたちがテストの点数に代表される業績原理だけで評価される度合いは確実に弱まった。高校入試から偏差値が追放され、推薦入試も広まった。さらには90年代以降の新たな教育理念のもと、教師や親たちが子どもたちに課す目標や要求は多元化し、結果として子どもたちにとってのハードルが低めに設定されるようになった。「子どものよさを生かす」教育、個性尊重の教育の推進は、子どもたちに劣等感を抱かせないようにと、自己イメージの改善を図ろうとしたのだろう。だが、その結果、現代の子どもたちは、自分自身を試したり鍛えたりするチャンスや体験を持ちにくくなったのかもしれない。

少なくとも学習面でみるかぎり、学校側が求める学習量の減少に伴い、子どもたちの学習離れが進んだ。勉強以外の面で自分を鍛える機会が拡大したのならよいが、それもないまま、学習面で要求されることも弱まれば、「子どものよさを生かす」教育は、自分に対し肯定も否定もできない、あいまいな自己イメージをふくらませるだけなのかもしれない。以前にもまして「自分らしさ」が強調される個性重視の教育のもとで、子どもたちに否定的な自己イメージをもたせまいとする「善意」の教育が進むと、自己イメージのあいまいな子どもが増えていく。なんとも皮肉な結果である。

### 3. 学習意欲・学習行動・学力の階層格差

先に全体的な傾向としての学習離れの実態をみたが、学習離れは、子どもが生まれ育つ家庭の文化的環境の影響を受けた現象として生じている。しかも、家庭環境による格差は、学習時間や家庭での復習といった学習行動面だけに見られる現象ではない。学習をめぐる意欲にまで影響を与えている。

こうした家庭の影響を見るために、私たちは、とくにその文化的な環境の違いに着目した。詳しい説明は省くが、「家の人はテレビでニュース番組を見る」「家の人が手作りのお菓子を作ってくれる」「小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった」「家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」「家にはコンピュータがある」といった質問項目への回答をもとに、小、中学生のそれぞれに主成分分析という統計手法を用いて、家庭の文化的環境を示す一次元的尺度（文化的な環境の違いを数値化する一本の物差し）をつくった（親の職業や所得については、調査対象校の要望もあり残念ながら質問できなかった。だが、他の研究成果によればこれら家庭の文化的環境は、親の学歴や職業などの「社会階層」と相関する要因であることがわかっている）。この尺度を用いて、小、中学生のそれぞれの調査対象者の数がほぼ三分の一ずつになるように、三つの「文化的階層グループ」を構成した（上位グループ、中位グループ、下位グループ）。なお、八九年調査にはこれら

の調査項目が含まれていない。そのため、今回は、家庭環境の影響が強まったかどうかの変化については残念ながら直接分析することはできない。

表2-3は、小、中学生のそれぞれについて、家庭の文化的階層グループ別に、学習意欲、学習行動、学習の成果としての学力テストの結果を示したものである。はじめに、学習意欲について検討しよう。いずれの項目をみても、家庭の文化的環境の差が大きく出ている。小学校五年生という早い時期から、家庭の階層格差があらわれているのであり、その結果、文化的階層が下位グループの子どもたちほど、学ぶ意欲が減退しているのである。中学生の結果について詳しく数字を見ると、上位グループの五五・二%が「嫌いな科目も頑張って勉強する」（「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の合計）と答えているのに対し、下位グループでは三四・〇%と二ポイントもの差になっている。「家の人に言われなくても自分から進んで勉強する」でも十八ポイント近くの差がある。また、学校で受けた授業タイプについてたずねると、「総合的な学習の時間」がめざす、「自分たちで調べる授業」や「自分たちの考えを発表したり意見を言い合う授業」に対しては、上位グループほどそれらを望んでおり（といってもそれぞれ五二・九%、四一・六%にとどまる）、下位グループ（三二・一%、二四・一%）との間に二〇ポイント近い差が生じている。

次に、実際の学習行動について、家庭学習時間、週あたりの勉強日数の面からみよう。ここでは、特に「しない」子どもたちの割合を取り出し表にまとめた。また、学習時間と読書時間については平均時間を算出した。

表を見てまず驚くのは、小学生よりも中学生の場合に、学習離れが顕著なことである。どの階層グループでも、小学生に比べ中学生になると勉強時間が減り、宿題も予習も復習もしなくなる。しかも、小、中学生ともに文化的階層グループ間の格差が大きい。学習意欲にとどまらず、実際の学習行動の面でも、家庭の文化的な環境の差が大きく現れているのである。小学五年生の時点でこれだけの差が出ている。小学校段階から学習行動に階層差があるという事実は、無視できるものではない。

それでは、授業中の態度や授業への取り組みについてはどうか。「先生が黒板に書いたことはしっかりノートに取る」という最も基本的な学習行動について、「とてもあてはまる」と答えた子どもに着目すると、小学生の場合、上位グループで四七・四%、下位グループでは三二・〇%と、すでに小学五年生で家庭環境による差が明らかとなる。中学生でも格差は明瞭である（七〇・六%対五二・一%）。

「授業でわからないことをあとで先生に質問する」「テストで間違えた問題はしっかりとやり直す」という、学習への「主体的な」かかわりについても、階層グループ間の格差は大きい。「生きる力」の教育がめざす、子どもたち自身が「自らすすんで」行う学習においても、小学校段階から家庭環境の影響が表れるのである。

表の最後に、今回の算数・数学と国語のテスト結果を示した。上位グループと下位グループとの差は、小学生の国語では七点、算数で八点である。それが中学生になると、国語で九点差、数学では十四点差と、いずれの教科でも階層間の差が拡大する。

表2-3 学習意欲・学習行動・学力(文化的階層グループ別)

		小学校			中学校			
		上位	中位	下位	上位	中位	下位	
学習意欲	家庭での勉強の仕方	出された宿題はきちんとやる	93.2	90.5	82.2	71.7	67.2	55.9
		授業で習ったことについて自分で詳しく調べる	30.6	21.4	14.2	19.3	15.0	8.0
		嫌いな科目の勉強でも頑張ってる	74.1	69.4	54.0	55.2	45.7	34.0
		家の人に言われなくても自分から進んで勉強する	60.3	53.1	41.5	42.9	32.1	24.5
	受けたい授業	教科書や黒板を使って先生が教えてくれる授業	83.2	76.9	67.7	83.5	79.3	71.0
		ドリルや小テストをする授業	57.9	48.1	35.6	47.6	39.4	31.1
		自分たちで調べる授業	57.6	43.0	32.6	52.9	45.3	32.1
		自分たちの考えを発表したり意見を言いあう授業	59.1	43.9	38.0	41.6	29.1	24.1
	成績観	勉強はおもしろい	55.9	39.8	33.2	35.3	25.1	15.8
		成績が下がっても気にならない	41.2	44.5	50.4	23.9	27.2	35.7
		勉強は将来役に立つ	86.2	78.3	69.7	77.1	62.3	57.0
		人よりいい成績をとりたいと思う	69.4	65.6	64.7	81.4	77.5	63.8
学習行動	家庭学習	「しない」	11.8	16.9	19.9	31.4	42.9	57.5
	読書(漫画・雑誌を除く)	「しない」	31.2	44.2	59.9	43.1	60.7	67.9
	勉強日数(週あたり)	「ほぼ毎日」+「週4,5日」する	65.3	65.0	58.2	36.7	28.6	18.4
		「ほとんどしない」	11.5	16.6	27.0	26.9	38.6	56.8
	家庭での学習時間(平均時間)		51.2分	38.8分	35.3分	38.9分	27.3分	20.7分
	読書時間(平均時間)		40.2分	25.8分	19.9分	36.8分	24.5分	19.2分
	学校の宿題(家庭での勉強内容)	「しない」	0.9	1.5	3.9	21.0	31.6	41.7
	学校の復習(家庭での勉強内容)	「しない」	36.2	45.1	59.3	46.7	57.8	70.0
	学校の予習(家庭での勉強内容)	「しない」	51.2	59.1	68.5	64.8	69.8	81.1
	「先生が黒板に書いたことはしっかりノートにとる」(授業中の態度)	「とても」	47.4	42.4	32.0	70.6	63.6	52.1
		「まあ」	43.8	46.0	48.7	23.4	28.9	35.4
		「とても」+「まあ」の合計	91.2	88.4	80.7	94.0	92.5	87.5
	「授業でわからないことを後で先生に質問する」(授業への取り組み)	「とても」	13.5	8.3	8.3	14.1	9.9	6.6
		「まあ」	28.5	26.4	19.9	26.6	21.4	20.8
		「とても」+「まあ」の合計	42.0	34.7	28.2	40.7	31.3	27.4
	「テストで間違えた問題はしっかりとやり直す」(授業への取り組み)	「とても」	38.5	30.6	27.9	13.9	8.7	5.4
		「まあ」	35.0	35.6	34.7	31.1	26.1	18.6
		「とても」+「まあ」の合計	73.5	66.2	62.6	45.0	34.8	24.0
学習の成果	学力テスト(2教科合計得点の平均点)		147点	145点	132点	140点	134点	117点
	算数・数学のテスト(平均点)		75点	74点	67点	69点	65点	55点
	国語のテスト(平均点)		72点	71点	65点	71点	69点	62点

「学習意欲」の数値は「とても」または「まあ」と答えた者の割合。平均時間と平均点以外の単位は%。

第1章で、通塾経験による学力格差の実態を明らかにした。塾に行っていない子どもの学力の低下が著しいこと、その結果、中学数学では通塾の有無による学力格差の拡大が進んでいることが明らかとなったのである。ところで、塾に通えるかどうかは、当然ながら家庭の経済状態や親の教育関心によるところが大きい。中学生の場合、上位グループでは五六・四%が塾に通っているのに対し、下位グループでは三九・三%にとどまる(中位は

五三・二%)。小学校段階でも階層差がある(上位=三九・七、中位=三三・八、下位=二四・〇%)。過去十二年間で通塾率の格差が縮まっていないとすれば(中学生の場合、八九年と〇一年とで通塾率は減少傾向にあったことから、その可能性は高い)、第1章で見た塾に行っているものといないものとの間の学力格差の拡大は、階層的な格差の拡大を伴いながら進んでいたものであると推測できる。つまり、塾に行けない子どもたちにみられた著しい学力の低下は、階層的に不利な環境に育った子どもたちの学力低下と重なり合っていると考えられるのである。

#### 4. 新学力観と階層、学力

以上の分析から、新しい学力観に主導された教育の十年間で、学力の階層差が拡大している可能性が示唆された。なるほど、「旧学力が落ちても、新学力がつけばよい」といった言い分もあるだろう。多少「知識・技能」を中心とした詰め込み型の学力が落ちても、「自ら学び考える」「自ら課題をみつけ解決する」<生きる力>が、体験学習などを通じて身につけばよいという主張である。

しかしながら、そもそも新旧二つの学力は互いに無関係の、別々のものなのか。それとも相互に補う関係にあるのか。今回の調査では、「調べ学習」や「グループ学習」に積極的に取り組んでいるかといった、新しいタイプの授業への取り組みについてもたずねている。「関心・意欲・態度」までを学力に含めて考える新学力観からすれば、こうした授業への取り組み自体が、「新学力」を表すことになる。

それでは、新旧学力の間にはどのような関係があるのだろうか。ここでは、今回の学力テストの結果(国語と算数・数学の合計点)をもとに子どもたちを得点順に並べ、各グループに含まれる人数がほぼ等しくなるように4つのグループに分けた(それぞれを上位、中の上位、中の下位、下位と呼ぶ)。そして、このグループごとに、新学力的な学習への取り組みを調べた。

このような手続きに基づき、今回の「学力調査」でとらえた“旧”学力と、新学力との関係を示したのが表2-4である。中学生についてみると、「調べ学習に積極的に活動する」のは学力上位グループで五一・〇%に対して学力下位グループでは二六・一%と約半分にすぎない。「グループ学習の時はまとめ役になることが多い」についても、上位=三七・五%、下位=十七・七%と二倍の差がある。小学生の場合も、それぞれ二〇ポイント以上の差が出ている。つまり、かなり基礎的な内容である(旧)学力テストの得点と、調べ学習やグループ学習への取り組み(意欲・態度面での「新学力」)との間には、明確で強い関係が存在するのである。学力上位グループの子どもたちにとっても、必ずしも新学力